２　カーネーション生産の誕生

１　カーネーションは東京からはじまった

（１）米国帰りの澤田

「1909 年（明治 42 年）米国シアトルに在住していた澤田氏が帰国に際して「ホワイト・エンチャントレス」、「ピンク・エンチャントレス」、「ヴィクトリー」、「ローズ・ピンク・エンチャントレス」等外に２、３の品種を持ち帰り、当時之を東京市外中野町城山に小規模の温室を建て栽培したのが嚆矢である。」

土倉龍次郎・犬塚卓一の名著「カーネーションの研究」（1936 年（昭和 11 年）発行、修教社書院）にこのような記述がある。本書がなければ、今日、澤田のことも、カーネーション生産初期の先駆者の苦労をも知るところではなかった。

（２）歴史から消えた澤田

澤田はその後のカーネーションの歴史から姿を消す。

その理由を土倉は続けて記す。

「然し遺憾なことには当時同氏が栽培法に精通しなかった為に意の如き好結果を収めることが出来なかったが、同氏は之に屈することなく幾多の困難と闘ひつつも研究を積み、其の後３年を経て漸く栽培法を会得するの域に達したのである。此の切花を東京市内の生花商に出荷を試みたのであるが、未だ事業として成功するに至らないで、惜しくも 1912 年（明治 45 年）事業中途で病没して了つたのである。」

だからといって澤田の功績が減じるわけではない。

土倉は断定する。

「我が国に於けるカーネーション栽培の歴史を探究するに当たって、初期栽培の開拓者として同氏の名こそ特記すべき功績者と云わなければならない。」

（３）　開拓者澤田

土倉の記述は詳細で、綿密である。わが国のその後の発展に貢献した人々はすべて姓名を記しているが、澤田だけは澤田氏としか書いていない。

わが国のカーネーション生産の祖でありながら、経歴、人となりだけでなく、名まで不明であることは残念である。

東京都中央農業改良普及センターの荒川昭が中野区城山を調べたが、もはや澤田の係累は在住せず、澤田について知ることができなかった。また、シアトルの邦人組織にも記録が残っていなかった。

２　「カーネーションの父」土倉龍次郎

（１）1910 年（明治 43 年）菜花園を興す

志を果たせず、1912 年（明治 45 年）に病没した澤田にかわり、栽培技術を完成させ、体系化し、また数多くの品種を生み出し、カーネーション生産 100 年の礎を築いたのは土倉（どぐら）龍次郎であった。まさしく、「日本のカーネーションの父」とよぶにふさわしい人物である。

澤田に遅れること１年、1910 年（明治 43 年）に土倉は東京府上大崎（目黒）において菜花園を興し、カーネーション栽培に着手した。

写真１　「日本のカーネーションの父」土倉龍次郎

（２）土倉龍次郎が栽培した品種

品種は、ニューヨーク、ヘンダーソン社から種子を取り寄せたマーガレット系の「プレジデント・マッキンレー」（赤）と「マリア・インマキュリット」（白）の２品種。これは、横浜正金銀行シアトル支店長をしていた弟、土倉四郎から送ってもらったらしい。

さらには、同年秋、当時、駐米全権大使内田康哉夫人であった妹、政子の手を経て、「ホワイト・エンチャントレス」、「ピンク・エンチャントレス」、「ローズ・ピンク・エンチャントレス」、「プロスペリティ」、「ホワイト・パーフェクション」、「ヴ

ィクトリー」の6品種を輸入して栽培した。

また、1921年（大正10年）に、皇太子であった昭和天皇が英国へご渡航された際に、ある手蔓によって、オールウッド商会に直接交渉してもらい、カタログから優品と思われる12品種を選び、購入した。

（３）苗の生産と販売

それらを栽培したが、「エンチャントレス」に優る品種はなかった。

土倉龍次郎はわが国で初めての苗生産者でもある。実用種として「エンチャントレス」の苗を1本25銭で売り出したところ、近在の園芸家は菜花園に日参して苗を分けてもらったという。切り花が1本25銭で売れた時代であったから、苗の25銭は高くはなかった。

（４）さすがの土倉も失敗続き

後に名著「カーネーションの研究」を著す土倉ではあるが、はじめはうまくカーネーションを作れなかったようだ。

「栽培上の知識が全然なく、唯一般作物を作ると同様な方法で栽培に当たった為に、折角輸入した是等の品種も僅かに形骸を残存した様な不結果に終わってしまった。」

さらに、苦労話が続く。

「当時は温室も希な時代であり、カーネーション栽培に従事して居るものとしては、伊藤貞作氏の外に無かったので、現在（昭和10年頃のこと）の如く他園に於けるカーネーションの栽培状況を見学に行くと云ふ事も不可能であり、且何れも栽培上の知識を欠いて居たので、是が教を乞う可き指導者もなく、それが為独自の研究に依る外に道はなかったので、栽培上に払ふ苦心と創作的努力は容易ならぬものであった。」

悩ませたのは、軟弱な茎、スパイダー（アカダニ）、スリップスで、100年後の今日の悩みとかわらない。有効な農薬がなかった時代、ダニ、スリップスは水で洗い流す方法しかなかった。軟らかな茎は、その後、アメリカ式の軒高が高い温室の建設で、いくぶん解決した。

（５）技術の公開

カーネーションを枯らさずに育て、立派な花を咲かせ、出荷するということは、当時は最先端の高度な技術であった。そのため、園芸家は温室を人に見せ、技術を教えることはなかった。しかし、土倉龍次郎は惜しみなく技術を公開し、カーネーション生産の拡大に力をつくした。

菜花園で学んだのは、伊東一介（伊東元帥の孫）、森田喜平、荒木石次郎、国分清三郎、三好靱男などで、いずれもその後独立して活躍をする。

土倉は、良家の育ちと、あわせてクリスチャンの博愛精神をもった人物であったのだろう。

（６）品種改良の土倉龍次郎

土倉龍次郎はカーネーションを温室ではなく、露地で栽培したいと考えていたようである。それにより、農家の人がカーネーションを作れるようになるとの想いがあったのだろう。

あらゆるつてを頼って、欧米から品種を手に入れ、試作したのも、露地で作れる品種を探す目的もあった。

結局、日本に適する品種は、日本で作らねばならないとの結論に至り、自ら品種改良にのりだす。交配し、種子をとり、種子を蒔き、花を咲かせ選抜する、このためにどれだけ内外の文献を読み、試行錯誤をしたことか。

努力のかいがあって、続々と新品種を作り出し、世に発表した（表１）。

表1　土倉龍次郎が育成した主な品種

発表年		育成品種
1918年	（大正７年）	ドグラス・スカーレット（赤） ドグラス・ファンシー（黄色に薄色縦縞）
1919年	（大正８年）	菜花1号、菜花2号、菜花3号（いずれも黄）
1927年	（昭和２年）	桃山（濃桃色）、舞姫（緋朱色）、珊瑚（淡朱色）、黒光（海老茶地に黒紅立縞入り）、白砂（純白）、遠山桜（鮮薄色）、緋鹿子
1930～32年	（昭和5～7年）	白雲（純白）、泰山（純白）、黄袍（薄黄色）、旭日（鮮緋色）、黒耀（海老茶地）、淡牡丹（淡桃紫）、錦旗（白地に赤の刷目入り）、紫宸殿（濃紫）、新夕映（白地に中心より薄樺ぼかし）、西王母（鮮桃色）
1933年	（昭和８年）	羽衣（樺色）、太白（白）、白鳳（白）、紅陽（赤）、姆女の頬（淡紅色）、雲峯（白）

土倉・犬塚「カーネーションの研究」1936

（７）目黒から川崎市溝口へ温室を移築

土倉龍次郎の最初に建てた大崎町の温室は目黒駅前にあった。その土地を市電の車庫に提供を求められたため、1920年（大正９年）に林業試験場の隣接地、下目黒に移転した。ここに温室を建て、大勢の園丁がカーネーションを栽培した。

存命の末子土倉正雄によると、園丁の食事などの世話をする女中だけでも５～６人はいたらしい。

しかし本家の財政的窮状を救うため、この土地も手放し、1926 年（昭和元年）に、神奈川県高津町溝口へ温室を移築した。これが川崎市のカーネーション栽培の起源である。

土倉は移転に伴い、居を世田谷区池尻に構える。子供の通学のため、溝口には住まず、溝口の温室まで路面電車で通勤をした。

温室は園丁にまかせ、自分は育種と経営に専念した。

（８）大日本カーネーション協会の設立

1931 年（昭和６年）１月、土倉龍次郎のよびかけにより、玉川温室村生産者などが集まり相談した結果、1932 年（昭和７年）５月、大日本カーネーション協会が設立された。これは、当時急速に発展しつつあるカーネーションの研究機関がなかったので、英米のカーネーション協会とも提携し、自主的に研究、技術開発をするために作った組織である。

会長には土倉龍次郎、副会長には犬塚卓一が就任した。主な事業は、優良種苗の会員への配布、品評会の開催などである。

会報第１号によると、正会員 38 名、普通会員 10 名、東京、神奈川、兵庫、愛媛にまたがる組織であった。

1932 年（昭和７年）度には、「ピンクスペクトラム」、「ノーススター」、「ジプシー」に土倉の育成品種「旭日」、「白瑶」、「錦旗」の計６品種、12 本の苗を会員に配布している。

（９）昭和９年の品評会

大日本カーネーション協会主催の品評会および展覧会が、1934 年（昭和９年）２月１～６日に東京三越本店７階で開かれた。

出品は、一般競技花が 134 点、実生新花 55 点、参考品 10 余点、合計 200 点ほどのカーネーションが出展された。カーネーションだけでこれだけの品評会、展覧会が三越で開催できたのは、当時カーネーション生産が盛んであったとはいえ、土倉をはじめ、役員の努力の賜であろう。

審査員は新宿御苑福羽逸人の子息福羽発三、東京高級園芸市場理事長伴田四郎、温室村生産者の

写真２　大日本カーネーション協会総会

（1931 年（昭和６年）１月）

表2　大日本カーネーション協会展覧会

1934年（昭和9年）2月1日～6日　三越本店7階

章	品種	府県	氏名
名誉賞		東京	東京フローリスト
優秀賞		東京	日本フローリスト
特等章		東京	荒木農園
努力賞	ﾋﾟﾝｸ･ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	兵庫県	関西フローリスト（大石正矣）
	白雲	神奈川県	柳下熊次郎
奨励賞	実生新花	神奈川県	菜花園（土倉龍次郎）
	ﾎﾜｲﾄﾏｯﾁﾚｽ	東京	藤井権平
特別賞		東京	東京フローリスト
１等賞	ﾗﾃﾞｨｰ	東京	東京フローリスト
	太白	神奈川県	菜花園（土倉龍次郎）
	白雲	神奈川県	柳下熊次郎
	ﾎﾜｲﾄﾏｯﾁﾚｽ	東京	藤井権平
	ﾊｰﾍﾞｽﾀ	東京	橋本恭一郎
	ﾐｾｽ･C･Wﾜｰﾄﾞ	神奈川県	柳下熊次郎
	同	東京	長門正壽
	ﾊｰﾍﾞｽﾀ	東京	国分清三郎
	ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	東京	東京フローリスト
２等賞	ﾊｰﾍﾞｽﾀ	東京	麻生朝路
	ﾃﾞﾝﾊﾞｰﾋﾟﾝｸ	東京	鈴木　譲
	ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	兵庫県	落合敬三
	ﾊｰﾍﾞｽﾀ	東京	藤井権平
	錦旗1号	神奈川県	菜花園（土倉龍次郎）
	ﾐｾｽ･C･Wﾜｰﾄﾞ	東京	田中方助
	ｱｲﾎﾞﾘｰ	東京	国分清三郎
	ﾋﾟﾝｸ･ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	兵庫県	関西フローリスト（大石正矣）
	ﾐｾｽ･C･Wﾜｰﾄﾞ	東京	石川有終園
	ﾍﾞﾃﾙｰ	東京	長門正壽
	ｱｲﾎﾞﾘｰ	東京	日本フローリスト
	ﾋﾟﾝｸ･ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	東京	東京フローリスト
	ﾍﾞﾃﾙｰ	神奈川県	有泉次郎
	ﾃﾞﾝﾊﾞｰﾋﾟﾝｸ	東京	日本フローリスト
	白雲	東京	荒川中庸
	ｱｲﾎﾞﾘｰ	東京	日本フローリスト
	ﾉｰｽｽﾀｰ	東京	日本フローリスト
３等賞	28名は省略		
審査員			福羽発三
			伴田四郎
			長門正壽
			犬塚卓一
			鈴木　譲
			荒木石次郎
			藤井権平
出品点数	一般競技花	134点	
	実生新花	55点	
	参考品	10余点	

実際園芸、16(4)、1934

写真 3　大日本カーネーション協会主催品評会および展覧会(1934 年（昭和 9 年）２月１～６日、三越本店７Ｆ）

写真 4　大日本カーネーション協会主催品評会および展覧会(1934 年（昭和 9 年）２月１～６日、三越本店７Ｆ）

（実際園芸、16(4)、1934）

長門正壽、鈴木　譲、荒木石次郎、藤井権平に加えて犬塚卓一が務めている。東京、神奈川だけでなく兵庫県から犬塚卓一のもとで学んだ大石正矣も出品している。

優秀賞は日本フローリストの犬塚卓一、特別賞は荒木農園、荒木石次郎が受賞した。「スイートピーの荒木」ともてはやされた荒木はカーネーションでも優れていたらしい。

土倉龍次郎は自らの育成品種、「太白」、「錦旗１号」、命名されていない「実生新花」を出品している。

（10）カーネーション葬

1938 年（昭和 13 年）世田谷区池尻の自宅で他界。犬塚卓一ら大日本カーネーション協会の会員がカーネーション葬でおくる。まさに「カーネーションの父」として生きた土倉龍次郎の後半生であった。享年 68 才。

３　土倉龍次郎の人生

明治末に東京目黒で温室を経営し、弟は銀行のシアトル支店長、妹が駐米全権大使夫人。内外の文献を読破し、名著「カーネーションの研究」を著し、カーネーションの歴史をひもとくだけでなく、栽培技術を体系化し、メンデルの法則を解説するとともに、具体的なカーネーションの交配技術を写真で示し、自ら新品種を作り上げてしまう生産者、土倉龍次郎とはどんな人だったのか。

（１）前半生は「台湾の林業・水力発電の先駆者」

土倉龍次郎の人生は興味深い。

カーネーションを生産する前と後で 2 度の人生を生きた。

土倉は 1870 年（明治 3 年）に、奈良県吉野郡川上村で生まれる。したがって、カーネーションを始めた 1910 年（明治 43 年）は 40 才の男盛り。

家業は代々林業家。並みの山林地主ではない。父土倉庄三郎は、「吉野林業の父」、「日本の造林王」とよばれる傑物であった。

造林植林経営で大きな足跡を残すだけにとどまらない。自由民権運動の板垣退助（後首相）に資金を援助したことは有名であったらしい。

新島襄の同志社創立にも協力した。その関係か、土倉龍次郎、その妹政子ら兄弟姉妹は同志社で学んだ。

龍次郎は 1895 年（明治 28 年）、25 才で台湾に渡った。

森林ジャーナリスト田中淳夫は自らのホームページに記す。「日清戦争後、台湾を領有した日本は、台湾先住民、いわゆる高砂族がいる山岳部には手がだせなかった。そこに龍次郎は1万町歩300年の借地権を得て、首狩り族でもある先住民の抵抗のもと植林を進める。」

一方で、他の部族との融和を図り、信頼を得た上で植林事業を推進した。

龍次郎の活躍はさらに続く。台湾の工業化を推進するために、初の本格的な発電事業として、1903年（明治36年）、龍次郎は台北電気株式会社を設立する。

現在も、「台湾の林業・水力発電の先駆者」として、歴史に名を残している。

台湾での土倉龍次郎の活躍ぶりは、まさにハリウッド映画を見るがごとくであった。

（２）台湾林業・発電の先駆者がなぜ花作りに

吉野川上村の土倉家の財政が傾き始める。

台湾での事業を財閥三井合名会社に譲渡した土倉龍次郎は本家を助けるために、1909 年（明治42年）、帰国した。

しばらく家族（妻、娘二人）と神奈川県大磯で静養した後、1910年（明治43年）東京大崎町（目黒）に温室を建設し、カーネーション栽培をはじめた。

林業家、実業家がなぜ花作りか。

龍次郎の末子正雄は、実業界に嫌気がさしたこと、もともと植物に興味があったことから花作りに転身したと推測する。菜花園の「菜」は野菜の菜で、花と組み合わせて屋号としたこともその現れであろう。

土倉本家がその後どうなったかは、川田　順「山林王盛衰記－大和土倉家始末－」別冊東洋経済、1954年（昭和29年）にくわしい。それは小説家と林業関係者の領分であり、ここではふれない。

（３）土倉龍次郎とカルピス

写真1の肖像画は、「初恋の味」でおなじみのカルピスの社長室に掲げられていたものである。

カルピス創業者、三島海雲は1903年（明治36年）龍次郎の弟　五郎の資金援助を受け、北京に「日華洋行」を設立した。軍馬調達のため内モンゴルを訪れ、口にしたのが、後のカルピスのヒントになる乳酸発酵物であった。

1912年（大正元年）辛亥革命がおこり清朝が滅亡、1915年（大正４年）三島らはすべてを捨てて帰国、無一文になる。1917年（大正６年）カルピス社の前身、ラクトー株式会社を設立、この設立に土倉龍次郎が尽力した。

初代社長は台湾で土倉の事業の総支配人だった津下紋太郎、自身は監査役に就任した。戦後、長男　土倉富士雄が社長を務めた。

（４）土倉龍次郎の家族

土倉龍次郎は４男４女の子供に恵まれた。上の娘二人は台湾で生まれた。存命中の末子正雄は一部上場企業の社長、会長として世界を舞台に活躍した。やはり、土倉龍次郎の気宇壮大な血を引いているのだろう。土倉正雄と妻宣子による、夏聖禮ら「百年蒼桑－土倉龍次郎と台北亀山水力発電所」の翻訳書（2006年）がある。龍次郎の次男松生の子（龍次郎の孫）幹雄は「祖父土倉龍次郎」（2004年）を著した。

４　澤田の温室を受け継いだ伊藤貞作

（１）澤田温室のその後

1909年（明治42年）に建てられた澤田の温室はその後どうなったか。

土倉はその消息を述べている。

「澤田氏の没後、同氏の後を継いで伊藤貞作氏が之を譲り受け、引続いてカーネーション栽培に着手した。」

伊東貞作は1911年（明治44年）に東京高等農学校を卒業する前の年から、カーネーション栽培を試みたらしい。

「エンチャントレス」、「ハーリー・フーパー」、「スタンダード・ピンク」、「オリフラメ」、「デンチー」、「マダムフォンフート」などを栽培したが、いずれもがく割れが多く、実用性がなかった。

1912年（明治45年）5月に澤田の温室2棟150坪を譲り受け、さらに1913年（大正2年）には50坪を増築した。

（２）縦覧謝絶

当時、伊藤の温室には縦覧謝絶の札がさげられ、一般には公開せず、孤立的な経営であった。そのため、付近に同業者の出現があまりみられず、伊藤のその後の経過も明かでない。

５　土倉、伊藤につづく加藤東七

土倉龍次郎、伊東貞作とほぼ同時期の 1912 年（大正元年）、南葛飾郡亀青村の加藤東七は温室200坪を建てた。いきなり200坪の温室を建てた

ことに、世人は肝をつぶしたという。栽培品目はカーネーション、メロン、ナスであった。

このころのほとんどの温室経営者はアメリカ帰り、華族、資産家や野心家たちであったが、加藤は、現在では当たり前のことではあるが地元農家の出身であり、堅実な経営であったらしい。そのため、温室村に連なる農園主とは、あまり交流がなかったようだ。

カーネーションは1932～33年（昭和7～8年）ころに止め、野菜を作る。加藤はナスの促成の大家となり、「加藤の茄子」は神田市場で名声を博した。やはり、勤勉な農家であった。

1927年（昭和2年）に京成電鉄　青砥駅ができたあと都市化が進み、経営の縮小を余儀なくされた。

1940年（昭和15年）には、葛飾園芸組合の組合長に就任し、地域の発展に貢献をした。

加藤東七は亀青村の誰もが温室を見たこともなかった時代に、カーネーションを作り、周りの人々を驚かせたが、篤農家として、地元の発展に大きな貢献をした。

６　停滞から発達へ

（１）停滞の10年

澤田がカーネーション生産を始めた1909年(明治42年）から10年間ほどはカーネーション生産に新しい動きも発展もなかった。

高級園芸組合理事長　伴田四郎は、「大正の始め頃は東京において、100 坪以上の温室を利用していた人は、官庁、富豪以外では、目黒の土倉龍次郎、葛飾青戸町の加藤東七、中野区沼袋町の伊藤貞作の三名であった。カーネーション栽培に通風をあまりしないでただ保温するとか加温することばかりに注意を払っていたために、花茎の軟弱なものしかできなかった。」

「しかるに、1921年（大正10年）頃より切り花の需要が増え、カーネーションにも東京市内の生花商が目をむけるようになってきた。それによりカーネーション栽培に着手する温室業者も増えてきた。」と述べている。

（２）切り花の需要

明治末期には特に襟花の需要が多かった。洋服が珍しい時代、洋服を着る人はおしゃれだったのだろう、襟に花を挿した。1911年（明治44年）発行の「暁山園芸」によると、新橋停車場で売っている襟花はカーネーション、ゼラニウム、バイオレット・ヘリオトロープに限られていたという。襟花なら軟弱な茎でも良かったのだろう。神戸駅でも新橋駅にならって、襟花を売る花売り娘が出現した。

（３）趣味園芸から生産園芸へ

二項園　森田喜平はこの事情を解説している（実際園芸1928年（昭和３年）２月号)。

「明治30年から40年代は趣味本位の温室園芸が全盛時代でした。このころにも実用本位の営業温室はありましたが、その数、生産物の品質から言っても趣味温室の足下にも及ばなかった。

宮中のご宴会などの催しで、花卉を多く御用になる場合でも、すべて新宿御苑の生産物によられたもので、帝室の自給自足でした。ところが、今日では、民間の園芸が進歩発達したので、優良なる花卉蔬菜を作れるようになり、帝室で御入用の場合には、専門栽培家からお買いあげになるようになってきた。」

（４）分岐点は関東大震災

温室園芸の進歩した分岐点として、森田喜平は1923年(大正12年)の関東大震災をあげている。

「関東のおもな都市が焦土と化したときに、花卉の売れ行きが非常に良くなった。このことは、花卉がパンについで人間の生活に必要欠くべからざるものであることを物語っている。」

（５）昭和初期の花き園芸業界－カーネーションのライバル、バラ－

昭和初期の温室主要品目はカーネーションである。その坪数は東京府下が2,000坪、神奈川富岡方面が2,300坪、その他をあわせると4,500坪でカーネーション全盛である。しかし、昭和になってカーネーションを凌ぐようになってきたのは温室バラであった。バラの作付け坪数は東京府下で1,800坪、静岡市外で1,200坪の合計3,000坪であった。

カーネーション、バラにつぐ、小花（こばな）で多いのは、スイートピー、フリージア、雑花類ではルピナス、夏菊であった。

７　烏丸光大伯爵

（１）新宿御苑とアメリカで研修

黎明期のカーネーション生産に大きな足跡を残したひとりが烏丸光大伯爵である。

烏丸光大は1914年（大正3年)、大井町篠谷の

自宅に 100 坪の米国式温室をたて、二項園と名付けカーネーション栽培をはじめた。

烏丸伯爵は新宿御苑の第１回の研修生で、その後アメリカで研修をした。

（２）長田傳の帰国

1921 年（大正 10 年）に米国でバラ栽培を研修した長田傳が帰国をする。長田は二項園の栽培主任となり、米国式の温室を建て、斬新な技術により、バラとカーネーションを栽培した。これによりカーネーションの価値が一般に認められるようになった。

長田傳は、在米　井上琴次の手を介して、当時米国で流行していた「ピュアー・ホワイト・エンチャントレス」と「ラディー」を輸入、栽培した。「ピュアー・ホワイト・エンチャントレス」は純白で人気を博したが、「ラディー」は営利栽培種としては収量が少なかったため、期待したほどの好結果を得ることができなかった。そのため、烏丸、長田はバラ栽培へ方針を転換した。長田がアメリカで学んだ最新技術はカーネーションに生かされることなく終わった。

（３）分園を玉川温室村に

烏丸光大は 1924 年（大正 13 年）には、荏原郡東調布町上沼部（後の玉川温室村）に移り、森田喜平と二項園を開園する。

長田傳は独立し、馬込に温室を建て、バラを専門に栽培をする。

８　犬塚卓一の帰国

（１）犬塚卓一少年の大志

犬塚卓一は小学校卒業後、神田今川橋のたもとにあった呉服店につとめ、17、8 才のころ、すでに番頭として重きをおかれていた。そのころ、叔父がアメリカ、オレゴン州ポートランドで花の温室経営をしていた。一生を呉服屋として生きることに不満を感じていた犬塚は、叔父の農園があるアメリカへ渡ることを決心する。1907 年（明治 40 年）、10 代の少年の覚悟である。

犬塚はここで 20 年間、カーネーションと草花栽培を学んだ。温室 500 坪でカーネーションを栽培し、その他露地草花を作った。アメリカ人の農園に劣らぬ規模と内容であった。

（２）技術、温室とともに帰国

大正末に帰国する。第一次世界大戦が 1918 年（大正７年）に終わると、世界恐慌がおこり、わが国の経済も混乱し、為替相場が暴落する。

写真５　「日本のカーネーションの母」犬塚卓一

アメリカで金を貯めた園芸家が、強いドルをもって、1923 年（大正 12 年）の関東大震災後つぎつぎと帰国した。当時１ドルが４～５円もした。現在の価値では、4,000 円～5,000 円以上に相当する。

犬塚もその一人である。犬塚はアメリカで修得した新しい栽培技術とともに、カーネーションの多数の品種と、温室 120 坪（間口３間×奥行き 20 間２連棟）、ボイラなど暖房施設一式を船に積んで持ち帰った。

この温室は、それまでのイギリス、フランス型の軒が低く、規模が小さい、趣味的な温室から、大型で、軒が高く、天窓が大きい実用的なアメリカ温室へかわる契機となった

犬塚の帰国によりもたらされた情報、栽培技術、温室、資材などにより、その後わが国の温室園芸は飛躍的に発展した。

ここに土倉龍次郎が築いたカーネーション産業の基礎が、犬塚卓一により一気に花開き、戦前の隆盛期を迎えた。

（３）日本フローリスト東京分園

その温室は 1925 年（大正 14 年）秋に建て、叔父が経営する日本フローリストの東京分園とした。荒木、烏丸、鈴木、藤井につぐ玉川温室村の企業的経営者の誕生であった。

オレゴン州の冷涼な気候で有効であった温室と栽培技術も、東京の高温多湿には歯が立たなかった。軟弱なカーネーションになった。仕方なく、天窓、側窓の構造をかえ、通風をはかったところ、

写真６　アメリカ式の軒が高い温室

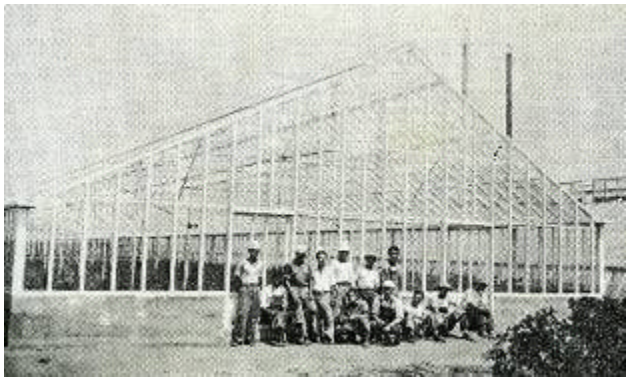

写真７　日本フローリスト（犬塚卓一）の園丁、研修生たち（植松敬）

茎が硬いカーネーションができるようになった。

年々、温室を増やし、550 坪にまで増えた。「ラディ」、「エンチャントレス」、「ビクトリー」、「スペクトラム」、「ノーススター」、「ハーベスター」、「トプシー」などの品種を栽培した。出荷先は、高級園芸市場で、つねに最高値で売れた。しかし、春先になると急に徒長し、４月からは長門正壽にかなわなかったと、長男犬塚竜一は回想する。

労働力は７人で、そのうち５人は研修生。給料は１か月５円で、主任には 20 円を支給した。

1944 年（昭和 19 年）長男犬塚竜一が召集された。そのため、温室を半分に減らし、残りは解体し、売り払った。残った温室で野菜苗を作った。

（４）「カーネーションの母」犬塚卓一

このような緊迫した時期に、土倉龍次郎と共著で「カーネーションの研究」を出版した。

戦後、カーネーション栽培を再開するも 1954 年（昭和 29 年）病魔におそわれ没す。日本のカーネーション栽培を開拓した輝かしい人生に幕を閉じた。土倉龍次郎が「カーネーションの父」とすると、犬塚卓一は「カーネーションと母」とよぶべき人といえよう。また、「育種の土倉龍次郎」に対して、「栽培の犬塚卓一」であった。

（５）その後の犬塚温室

長男竜一は 1963 年（昭和 38 年）に 300 坪の温室をバラにかえた。しかし、カーネーションの犬塚もバラは勝手が違った。完全な失敗であった。温室を縮小し、観葉植物に転換した。

湯尾啓治が竜一に聞き取り調査をした 1970 年（昭和 45 年）にはまだ巨大なボイラがあった。500 坪の温室を暖房したこのボイラは、１晩に石炭１トンを燃やしつづけた。そこは現在、高級宅地、大田区田園調布である。

９　新宿御苑のカーネーション

（１）新宿御苑

新宿御苑は 1874 年（明治７年）、勧農寮内藤新宿出張所農学掛試験地として設置された。農業、蚕業、畜産、農産加工などの実験実習や種苗の導入、増殖、配布など、今の農業試験場のような役割であった。

1879 年（明治 12 年）、施設だけが宮内省に編入され、新宿御苑となった。

その目的は、宮中で使われる野菜、果実、装飾用の花の生産と、庭園として内外貴賓の園遊接待の場であった。

皇室での食卓の装飾用盛り花には季節はずれのもの、熱帯植物など珍奇なものが求められたが、民間では生産がなかったため、御料地で自給した。また、当時、民間で生産される野菜が非衛生的なことも自給の理由らしい。

（２）福羽逸人子爵

福羽逸人は、勧農局が設立された 1877 年（明治 10 年）に同局試験場農業生になり、その後、1886～1889 年（明治 19～22 年）に欧州に留学を命じられ、園芸を学んだ。帰朝後、1891 年（明治 24 年）に御料局技師として新宿御苑勤務を命じられ、1917 年（大正６年）に退職するまで、御苑の建設とわが国の園芸振興に大きな役割を果たした。

（３）カーネーションではなくオイエー

新宿御苑でいつごろからカーネーションを栽培していたか定かではないが、ご子息の福羽発三や研修生の五島八左衛門の記憶によると、1907 年（明治 40 年）には作られていたらしい。

福羽逸人はフランスからカーネーションを輸入

したため、新宿御苑ではカーネーションとではなく、フランス語の Oeillet（オイエー）とよんでいた。そのため、園丁たちは世間でいうカーネーションがオイエーのこととは知らなかったという。

写真 8　新宿御苑園長　福羽逸人子爵

（４）澤田より早い福羽逸人のカーネーション

1907 年（明治 40 年）以前からカーネーションを作っていた福羽逸人は、1909 年（明治 42 年）にはじめた澤田や、1910 年（43 年）の土倉龍次郎より早いことは明白である。

しかし、先に述べたように、新宿御苑のカーネーションは皇室のための生産であり、生活のためのカーネーション作りではない。多くの研修生を育てた業績は認めるものの、わが国のカーネーション生産第 1 号ではないし、（社）日本花き生産協会カーネーション部会に集うカーネーション生産者のルーツでもない。

10　日本初の花市場－高級園芸市場－

（１）大日本園芸組合

1917 年（大正 6 年）ころ、園芸界の重鎮、気鋭が集まり、園芸界の今後を話し合い、園芸組合設立の構想をもつにいたった。数度の協議を重ねた結果、1918 年（大正 7 年）に大日本園芸組合が誕生した。

この設立に名があがっているのは、早川源蔵の記録によると、早川の他、森田喜平（戸越農園主任）、倉本彦五郎、土倉龍次郎、伴田四郎らである。組合は事業として、機関誌の発行、外国種苗の購入、講演会の開催などを着々と実行していった。

（２）せり市場の誕生

1923 年（大正 12 年）9 月、突如としておこった大地震により東京市内の大半は灰燼に帰した。この復興の過程で、経済の成長が起こり、花の需要が増加した。需要増加に伴い、組合の面々は、取引機構に不満を募らせてきた。明治後期から、大正時代に誕生した花問屋は価格形成が不明朗であり、取り引きが不定期で、支払いが遅いなどの問題点が指摘されていた。

この機を逸せず、大日本園芸組合では、生産者の花市場の設立を計画し、1924 年（大正 13 年）、西銀座に高級園芸市場を開設した。日本初のせりによる花市場の誕生である。

取引品目は、一般花きの他、温室ぶどう、メロンなどの高級果菜類であった。手数料は組合員 5%、非組合員 10%と定めた。

市場責任者は、園芸組合組合長烏丸光大、理事長伴田四郎、せり台石山顕作と記録されている。

そのころの荷主には、カーネーションでは大塚、加藤、荒木、土田、鈴木、バラでは二項園、長田、静岡ばら園の名があがっている。

（３）各地に花市場が誕生

この市場は多くの生産者から支持され、1924 年（大正 13 年）以降、各地に花市場が誕生していった。1925 年（大正 14 年）には横浜生花卸売市場、神戸園芸組合、1931 年（昭和 6 年）には福岡花市場が開設された。

高級園芸組合市場伴田四郎によると、1939 年（昭和 14 年）の生花市場は全国に 60 あり、そのうちの半数 30 が東京であった（表 3）

日本初の花市場　高級園芸市場は戦争のあおりをうけ終戦を前にして 20 年の歴史に幕を閉じた。

写真 9　日本最初の花市場　高級園芸市場

表3　主要都市における花卉市場
（1939年（昭和14年））

	地域	市場名
1	東京	池袋生花市場
2		巣鴨生花市場
3		大塚生花市場
4		神田生花市場
5		日本橋生花市場
6		本所生花市場
7		東京生花市場
8		緑生花市場
9		高級園芸市場
10		駒込生花市場
11		京浜生花市場
12		芝生花市場
13		新宿生花市場
14		渋谷生花市場
15		氷川生花市場
16		幡ヶ谷生花市場
17		大崎生花市場
18		大森園芸市場
19		蒲田生花市場
20		東北生花市場
21		城西生花市場
22		千住生花市場
23		世田谷生花市場
24		飛鳥山生花市場
25		荒川生花市場
26		赤羽生花市場
27		目黒生花市場
28		亀戸生花市場
29		淀橋生花市場
30		八王子花卉市場
31	大宮	大宮生花市場
32	横浜	横浜生花卸売市場
33		横浜園芸組合生花市場
34		見染生花市場
35		港南生花市場
36		金港生花市場
37		森生花市場
38	横須賀	横須賀中央生花市場
39	川崎	川崎花卉植木市場
40	平塚	平塚生花市場
41	名古屋	生花市場
42	京都	京都花市場株式会社
43		京都高級園芸市場
44	大阪	関西高級阪南市場
45		大日本園芸市場
46		大阪園芸市場組合
47		大阪花市場株式会社
48		上田生花市場
49	神戸	神戸高級生花市場株式会社
50		神戸園芸市場株式会社
51		神戸中央園芸市場
52	岡山	岡山高級生花市場
53	広島	広島高級園芸市場
54	呉	呉生花市場
55	下関	下関高級園芸市場組合
56		下関市農会花卉市場
57	福岡	福岡花卉園芸市場組合
58	久留米	久留米花卉市場
59	福島	福嶋生花組合市場
60	札幌	札幌花市場

伴田四郎、日本園芸発達史、1943年（昭和18年）

（４）出荷方法

初のせり市場である高級園芸市場の伴田四郎は出荷の方法を生産者に説明している。

１束の本数は、温室物では、カーネーション 20 本、バラ 10 本、スイートピー50 本、百合 10 本など、露地物ではカーネーション 50 本、大中菊 10 本、小菊１握、ダリア 10 本、金盞花 10 本などである。

切り前は、花が咲きはじめて２日目くらいが最も適している。

包装は、東京付近の栽培者は、自転車または電車で運搬するので、カーネーションのように傷みやすいものは、１束づつ新聞紙などに包む。

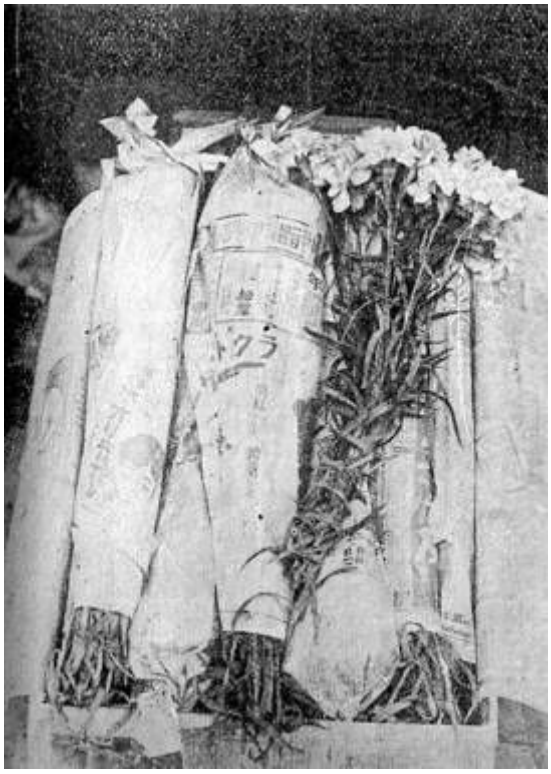

写真 10　カーネーションの出荷形態
（伴田四郎、実際園芸 6(2)、1929）